

ターニヤがケーキを
作ってレルゲンとかに
食わせるショート
ショート

潜水艦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル以上のものではありません。数話で完結すると思います（まだ書いてない）。
ガールズラブタグをつけてましたが、別にいらねえかと思つて外しました。

ある意味一話完結です。

目次

ターニヤがヴィーシャとケーキを作つて	
レルゲンに持つていく話	1
ヴィーシャがターニヤとケーキを作る話	
上	16
ヴィーシャがターニヤとケーキを作る話	
下	29

ターニヤがヴィーシヤとケーキを作つてレルゲンに持つていく話

「成人男性の喜ぶ物……ですか？」

「貴官も年頃の娘だ。そういうものの一つや二つ知つていてもおかしくはないと思つてな」

「ちゆ、中佐殿がお慕いしている男性への贈り物……私の……中佐殿が………」
「誰が『私の』だ」

帝都へ戻る航空輸送機の中からごきげんよう。

仕事を万全に完了させた報告を持ち帰る時ほど清々しい事はございません。

申し遅れました。小官はターニヤ・デグレチャフ魔導中佐であります。

誤解の無いよう申し上げておきますと、小官は断じてセレブリヤコーフ中尉のもではありません。

こんな雑談に興じていられるのも我が第203航空魔導大隊が敢闘精神旺盛に敵を千切つては投げ回していた所をしっかりと参謀本部にご覧いただけいたからこそであるらしく、その健闘を称えて内容はサプライズで素晴らしい任務と、ある程度の休暇を

参謀本部より宛がっていたただけるそうであります。

たまにはゴネてみるのも悪くないですね。

この機会に、いつも……査問会議では特にお世話になったゼートウーア、ルーデルドルフ両閣下、並びにレルゲン大佐殿に何か贈り物でもして好印象を得ておくというのも悪くない。

それに、今回の休暇を進言してくださったのはレルゲン大佐殿らしい。最近思うのだが、参謀本部で私の真意を見抜いているのはレルゲン大佐殿だけなのかもしれない。一際豪華な物を送ろう。

大量に余らせている給料の使い道を作り、経済活動に参加しておくというのは資本主義社会において特に重要な事であり、余計な事は進んでやるくせに何故か信仰は集められると信じて疑わない自称神よりはよっぽど確たる正義だ。個人が金をいくら溜めても社会は裕福にならず、社会が裕福にならなければ個人が裕福になる事もないのである。

といつても、私が欲しかったものPSVRは……発売前に私が“こう”なってしまったし、そもそもこの時代にそんなものが売っている訳が無い。

もちろん両閣下も必要な物は全て持っておられる筈なので、数があつても困らないも

のがいい。嗜好品という手もあるが、ゼートウアー閣下はまた禁酒中だし、全員タバコを吸っているが当然ながら私は吸っていないので全く詳しくない。

前世と合わせれば中年と言ってもそろそろ差支えの無い年齢ではあるが、正直この時代の人々が何で喜ぶのか見当もつかん。

いや、そういうえは有ったぞ。日常的に使用して場所を取らず、かつ安すぎないもの。この時代でも定番ならいいのだが、元々軍事オタク気味だった私は、この時代の戦争背景に多少詳しいが、生活などにはそれほど詳しくないのだ。とはいえ、他に気の利いたものを思いつかないのも事実。

「よし」

となれば、帝都に戻り報告を終えたらすぐに買い物に行くか。と心を決めると、セレブリヤコーフ中尉が何やら言いたそうにしているので促す。

「中佐殿？ 何を贈るか決められたのですか？」

「ああ。ゼートウアー、ルーデルドルフ両閣下には万年筆を、レルゲン大佐殿にはそれに加えてもう一つ何かをお送りしようと思う」「中佐殿はレルゲン大佐殿と……その、親交を深めたいと？」

「ああ、レルゲン大佐殿は良識と常識を持ちつつも士官として非常に優秀な御方だ。それに、今回の休暇もどうやら大佐殿が捻じ込んでくれたらしい。司令部に居ながら貴官

らの疲れを見抜いたその視野の高さには恐れ入るよ」

私も良識ある文明人として殺すだの殺されるだのという戦場に長く居るのは、正直に言うともちろん嫌だ。当然、出来る事なら銃弾飛び交わぬ安全な後方で書類仕事に従事したいものだ。そして、元々会社では人事を担当していた私にとって、レルゲン大佐殿の椅子は正しく憧れの場所。好印象を与えて、いずれは……というより帝国の敗北が確定する前にその後釜につきたいものだ。

「とはいえ、何をお送りすればいいものか……」

「中佐殿、そういう時、婦女子は手作りの料理を贈るものです」

そういう時がどういう時かは知らないが、作戦行動の時のように真剣な面持ちで言うのであれば恐らく間違いないのだろう。

しかし二つ問題がある。

「私は人に出すような料理なんか作れんぞ」

「大丈夫です！ 私が誠心誠意お教えします！ 中佐殿の想いがレルゲン大佐殿に届く

よう……！」

一つ目は即座に解決したが、二つ目は……まあ個人的な理由によるものなのでいまいち言い出しにくい。金を使うのは容易いが、時間を使うのは少々面倒だ。休暇とはいえ、銃を持って飛び回らなくてもいいだけで、処理しなければいけない書類も、処理し

ておきたい書類も山とある。しかし、それを部下に言っても仕方ないので、私は方便を使う事にした。

「いや、元々私の思いつきによるものであり、完全にプライベートの用件に部下の休暇を消費させるわけにはいかん。休養も仕事のうちだ。私は私で、出来合いで評判のいいものでも買って持っていく」

「いけません！ 中佐殿は何をを考えていらつしやるのですか！ 女が男に贈り物をするのですよ！ 中佐殿は本当に女の子ですか、まったくもう！」

「おう……」

誰が女の子だと思うより先に、男として女に気圧された気分だ。ある意味懐かしくもある感覚に対応しきれず微妙な返事をしてしまった。周りを見渡すとほぼ全ての隊員が目を丸くしている。恐らく私も似たような表情だろう。

「とにかく、1日は料理作りにお付き合いただきます。いいですね？」

「いや、その前に、その女の子というのを——」

「いいですね？」

「は、は、は」

かくして、私は何故か私より必死な部下に料理作りを手伝ってもらう羽目になった。

司令部に戻った後もひと悶着あり何かと騒がしくしているうちにさっさと次の行動

に移るといふ、いつものような休暇取り消しもなくなつてないほどあつさりとは解放された私は部隊に休暇を全うさせるべく、部下の待機している部屋の前まで来た。が、室内の様子がおかしい。中からなにやら話し声がある。

「今作戦は今までで最も重要な物である可能性があります。隊員各位、気を引き締めて臨んでください」

「セレブリヤコフ中尉、それは考え過ぎじゃないか？」

「いえ、ヴァイス大尉殿、中佐殿の目は本気のそれでありました。あの顔をご覧になつたでしょう？」

「言われてみれば確かに……グランツ、どう見る？」

「自分はそういつた機微には疎い方ですが……アレは本気だつたんじやないでしょうか」

「そうか？ 私がおかしいのか？」

「セレブリヤコフ中尉の手前大きな声では言いませんが、ヴァイス大尉は一度自分のおかしさを再確認したほうがいいのでは？」

「そ、それは言わない約束だろ……」

こいつら、休暇慣れしてなさすぎて変な勘繰りが入っているんじゃないか？ 幸い、

今回は本物の休暇だ。まあ、必要だつたとはいえこいつらをこうした責任の一端は私に

もある。ここはしっかりと伝えておく必要があるな。

「入るぞ」

「デグレチャフ中佐殿！」

何故か全員立ち上がり気まずそうな顔をしているが、戦局から見た作戦の予想を責めるほど私も狭量ではない。むしろそこは褒めるべきだろうが、こいつらが知られたくなさそうにしているのであれば知らないフリをしてやるのも上官としての務めか。

「さて、大隊諸君。流石にピアホールで連日飲み明かせとは言わないにしても、気を張り過ぎず体と心を休める機会だ。参謀本部の心意気は無駄にせぬよう、節度ある休暇を楽しんでくれたまえ。私も私で休暇を満喫させてもらおう。では、解散」

尤も、私は時間を無駄に使うほど恵まれた才能がある訳でもなければ、大隊各員と比べて戦闘大好きでもない。これを機に、前回は失敗した後方に帰り咲くための準備に勤しもう。

「では中佐殿、料理作りはいつになさいますか？」

「本当に作るのか……じゃあ三日後に頼む」

「はい！ では私はこれで」

スキップでもしそうな足取りで部屋を飛び出すセレブリャコーフを啞然と見送っていると、中隊長連中がこちらに敬礼をしてきた。

「ご健闘をお祈りいたします!」

「は? ……まあいい。貴官らも、羽目を外し過ぎるなよ」

「はっ! では、失礼いたします!」

じんせいというのはかくもままならないものである。この供給不足の世の中でどうやってこんな無駄な装飾を手に入れたのかと思わざるを得ない、手編みのレースがあしらわれた小奇麗なエプロンを装備させられて、目の前には小麦粉、卵、ブランデーとベーキングパウダーにチョコレート、ココア、砂糖、それに生クリームだ。髪の手から足の爪まで贅沢を固めてきたようなテーブルを見て啞然とするほかない。

「やはり女性から男性に物を贈るとなれば、甘い物が定番です。レルゲン大佐殿も参謀本部勤め。頭を使ったら甘いものが欲しくなる筈です!」

「その理屈はわからなくもないが、何故エプロンを……しかもよりもよってこんな……」

「デグレチャフ中佐殿は私服をほとんど持つておられず、今日来てみれば案の定軍服でございませんか。中佐殿は我々に休暇を命じてもご自分は全く休まれないお方だというのにはラインからの付き合いで存じております」

別に休んでいない訳ではないし、堂々と休日は無意味に費やしたいという気持ちも勿

論ある。まあ、それが出来ればという前提もあるのだが、今後はもう少し休暇を楽しんでいるという事を、せめて私服のひとつでも着てアピールしてやらねばなるまいな。

などと現実から目を逸らしている間にも、中尉は異常なほどの手際で様々な道具を用意している。

悲しいかな、その多くが私には使い方もわからない代物なのだが、いつの間にかそんな事を覚える暇があったのかセレブリヤコーフ中尉は説明と共に道具を握らされた私の手を背中から握って分量を量ったり材料を混ぜたりと実に手際が良い。

間に私が挟まっただけでは邪魔だろうと抜け出そうとしたら怒られた。どうやらこの状態でもこの『チョコレートを使った何某か』は私が作っている事になるらしい。

「ところでセレブリヤコーフ中尉」

「はい、何でしょうか、デグレチャフ中佐殿」

作り始めて1時間ほど経っただろうか。丸い型に流し込んだ茶色いペースト状のソレをオーブンに突っ込んで一息ついた私の言葉に中尉が飛び上がった。

「コレは今何を作っているのだ？」

「ええ!?! わからなかったのですか!?!」

「うむ、いや……ケーキなんだろうとは何となくわかるのだが、正直こういうものを食べる機会が無かったから全く完成図が予想できん」

軍大学時代の行きつけの喫茶店でコーヒーを頼んだ時にたまにおまけで出てくるケーキも切った後の物だったし、個人的に前線に持って行っているのも板チョコプレートだ。糖分が多いため頭を使ったら欲しくなる。カロリーが高く、不味くないのも高評価だ。だがそれだけのもの。そこにこだわりは無く、軍用チョコプレートじゃなければ何でも万歳だ。

セレブリヤコフ中尉は何故か顔を手で覆って震えているが、寝不足だったのだろうか。まあたつた三日でこの時勢にここまで食材を手に入れたのだ。寝不足にもなるうというものだ。優秀な副官を無為に疲労させるのも本意ではない。労いを込めて、まには私がコーヒーを入れてやろう。

元が黒いからわかりにくいのが、焦げたりもせず無事に出来上がったらしい生地をオーブンから取り出し、ホイップした生クリームにココアと湯煎したチョコレートを混ぜて生地に塗りたいくつた。

至って普通のチョコケーキに見える。初めてにしては中々見栄えがいい。まあそれも当然ではあるが。

「完成です！ お疲れ様でした」

「私はほとんど見えているだけだったかな」

「まあそれは戦後にゆっくり覚えられたら良いかと。中佐殿はまだまだお若いのです」

「戦後か……まあ、そうかもしれないな」

この情勢にあつても、というか、この情勢だからこそセレブリヤコーフ中尉は………いや、誰しもだろう。誰しもが帝国が負けるなんて露ほども考えていないのだろう。

戦争が終われば資源と時間を余らせるほど手に入れられるだろうと。それを使って何でもできる筈だと。

だがそれは帝国が勝利するという前提が無ければ成り立たない話だ。『負けない』ことと『勝つ』事が同義だった頃とは違い、ただ勝つだけで勝ち続ける事のできない近代戦にそのロジックは通用しない。

だが、そんな夢を語る状態でもなければ戦争なんてやってられないだろう。それに、夢が兵士を、前線を、人々の生活を支えているのだ。下手な事を言つて折れてはかなわん。

結果私は曖昧な返事をしてしまっていた。

「では早速お届けに上がりましょうか」

「もう行くのか?」

「はい。ケーキは生ものですから」

中尉に背中を押される形で宿舎を追い出され、小奇麗にラツピングされたケーキとモントブランド文具店で買ってきた万年筆を持って突っ立っていると、幾分も待たずに車が回される。実に手際の良い事だ。

そのまま参謀本部まで連れ去られて、こちらを見るなり何故かギョツとした顔をした受付にレルゲン大佐殿が居られるか問い合わせているセレブリヤコフ中尉の背中を見ながら、将来は豪胆な母親になるのだらうなどと考えていると、後ろから声をかけられた。

「おや、貴官はデグレチャフ中佐——ッ!?」

振り向くとその人、レルゲン大佐殿だ。何故かとんでもないものを見たという顔をしているが、ひとまずさておき挨拶をしたものの心ここに在らずという有様で、セレブリヤコフ中尉の挨拶にも空返事。戦局に何か良からぬことがあったという感じでもない。首を傾げていると中尉に背中を軽く叩かれる。

「中佐殿、贈り物贈り物」

小声ではあるが、この距離だ。本人にも聞こえているだろう。やりにくい事この上ないが、突っ立っている訳にもいくまい。

「失礼いたします。レルゲン大佐殿、お時間よろしいでしょうか」

「あ……ああ。特に問題ない……ついてきたまえ。その、出来れば貴官の副官も……」

「では、私は外で待機しております。中佐殿、ご武運を」

ああ、行ってしまうのか。表情には出していないと思うのだが、レルゲン大佐殿を見ると私の心の顔と同じ表情をしている。

「今日はそのような……ああいや、どのような用件か？ 貴官は確か休暇中だった筈だが」

「はい、大佐殿。小官は普段からお世話になっていいる大佐殿にせめてもの恩返しをと。お気に召されるかわかりませんが、是非ともお受け取りください」

「これは……近頃市井で話題になっているという文具店の万年筆か」

「参謀本部勤務ともなれば書く文字の量も膨大でしょうと思い、僭越ながら評判の良い物を選ばせていただきました。ゼートウアー閣下とルーデルドルフ閣下にも同じものをお送りさせていただくつもりであります」

「ああ、それは実にありがたい。安いペンだと手が疲れるのだが、いいものは贅沢かとなかなか手が出なかつた所だ。貴官には世話になりっぱなしだな」

さて、妙にそわそわしているのはレルゲン大佐殿だけではない。私もさっさとこの爆

弾を処分したいのだ。申し訳ないが、手伝ってもらおう。

「あとこちらを……」

「これは？」

「チョコレートケーキです」

「まさか手作りか？」

何故わかったのだろうか。特にラッピングに特徴がある訳でもない筈だが……レルゲン大佐殿は案外ケーキにお詳しいのかもしれない。

「はい。お口に合うと幸いなのですが……」

「そ、そうか。感謝する。……良ければこれからコーヒーでも——」

「では、小官は副官を外に待たせておりますので、これで失礼いたします」

何か言おうとしていたのだろうか。話が区切られたと思いきや言葉を被せてしまったが、聞き返そうとしたら普通に返事が返ってくる。

「あ、ああ、そうか。感謝する」

「どうでしたか、中佐殿？」

「ああ、渡せたぞ」

「そんなあつさり！ もつとこう、何かあったでしょう!？」

「いいや、普通だったけど……」

「なんで普通なんですか！」

我が副官が最近情緒不安定なんだが、どうにか対策をした方がいいのだろうか。

しかし、たまには料理というのも案外悪くない。いつもと違う事をするというのは、それはそれでリフレッシュになる。帰ってから中尉と余っていた生地で焼いたケーキをつつきながらそんな事を考えていた。

夕方、借りていたエプロンを中尉に返そうとしたところで妙な違和感を感じるも、まあ大したことではないかとそれを無視した。

まさか裏であんな面倒な事になっていたとは、この時の私は全く考えもしなかったのだが、それはまた別の話だ。

後日、自分一人で焼いてみたケーキはとてもあの時のようには上手くいかず、かといって捨てるほどのものでもないという微妙な物が出来てしまったため、暇そうな隊員に声をかけて食わせておいた。

何故か大喜びしていたが、この程度のものなら帝都であれば食えないでもないだろうに、変な奴らだ。

ヴィーシャがターニャとケーキを作る話 上

自分が聞かれた質問の意味が良くわからなかったヴィクトーリヤ・イヴァーノヴナ・セレブリャコフ中尉は、思わず上官の言葉をそのまま返してしまう。

「成人男性の喜ぶ物……ですか？」

妙な訊き方だとは思った。思わず辺りを見渡すものの、航空輸送機の中は結構うるさい。会話に気付いている者は居ないように見えた。

「貴官も年頃の娘だ。そういうもの一つや二つ知っていてもおかしくはないと思っ
な」

この言い方からすれば、恐らく大隊員の畏怖と敬愛を一身に集める小さな大隊長殿は、どうやら気のある男が居るらしい。ヴィーシャは「この環境の中で異性を気に掛ける余裕がある年下の女の子」に対する微妙な敗北感と、自分と一番長く一緒に居る女の子に懸想されている誰かに対する嫉妬心でおかしな事を口走ったものの、それに対するお咎めは特に無かった。

というのも、当の上官であるターニャ・フォン・デグレチャフ魔導中佐殿が難しい顔をして何やら考え込んでいるからだ。

もう少し詳しく話を聞いた方がいいんじゃないかと思いつつも、正直言つて自分もそのような経験は無い。わかる事といえは友人で耳年増のイーリヤが話していた市井の恋愛事情くらいだ。

それに、思い返せば誰に贈るかという部分を訊いていなかった。

「よっ」

エンジンの大きな音にかすかに紛れ込んだ、小さくも高く張りのある声。聞き間違えようもない自分の上官の声だ。

何を贈るか決められたのだろうか。ターニヤは年齢に見合わないほどの戦果と先見性を持ち、知識と知略に優れた士官だが、時たま年相応の表情を見せる時がある。特にそれは戦争と関わりの無い部分に顕著だ。

ヴィーシヤは上官が……というより、最も親しい幼い女の子がズレた物を贈つて恥をかかないか気が気ではないのだ。

難しい顔をしてうんうんと唸っているヴィーシヤを見かねたターニヤが話すように声をかけると、どうやらゼートウーア中将与ルーデルドルフ中将、それにレルゲン大佐に万年筆を贈るらしいが、ターニヤの言いようでは恐らくレルゲンが本命だろう。曰く「レルゲン大佐殿にはそれに加えてもう一つ何かをお送りしようと思う」と。

「とはいえ、何をお送りすればいいものか……」

「少尉殿、そういう時、婦女子は手作りの料理を贈るものです」

惚れた相手は胃袋から掴めとはエーリヤの談だ。

「私は人に出すような料理なんか作れんぞ」

「大丈夫です！ 私が誠心誠意お教えします！ 少佐殿の思いがレルゲン大佐殿に届くよう……！」

私はこれでも料理がそれなりに出来ます。もちろんプロの料理人には敵いませんが、料理は心です！」

しかしターニャは出来合いの物を持っていくといったとんでもない事を言っている。思わず強気で捲くし立ててしまったが、以外にも気圧されている様子を見るともうひと押しいけるだろう。

「とにかく、1日は料理作りにお付き合いただきませう。いいですね？」

「いや、その前に、その女の子というのを——」

「いいですね？」

「は、はい」

かくして、ヴィーシャは大隊長殿とのお料理権を勝ち取ったのであった。

ターニャが司令部に帰還報告を行っている間、待機を命じられた大隊員は最もホット

なニュースが気になって仕方が無かった。

「なあ、セレブリャコフ中尉」

「なんでありましょう、ヴァイス大尉殿」

「さつきは何を言っていたんだ？　中尉が中佐殿にあんなに声を荒げるなんて」

「そ、そんなに大きな声でしたか？」

はしたないと言われているようで、ヴィーシャは今更ながら口元を手で押さえる。

「そりやあもう、なんだか娘を叱る母親みたいな口調でしたよ」

「グランツ少尉まで！」

しかし、これは中佐殿の悩みで、皆さんに話していいものか……」

「ははは、何を今更。大隊長殿の悩みは大隊の悩み。我々は家族以上の絆を以て戦場を駆ける、栄えある203魔導大隊だぞ」

「そうそう。なんとたつて我が大隊は紳士揃いですから」

その言葉に何故か慌てるヴァイスを見ながらも、ヴィーシャの中では彼らになら話しても大丈夫だという謎の根拠が生まれたのだ。

「実は……デグレチャフ中佐殿は、レルゲン大佐殿に恋愛感情を抱いているようなのです」

「……セレブリャコフ中尉」

「なんでありませんか、ヴァイス大尉殿」

「勘違いじゃないのか？」

「いいえ、私が中佐殿に、レルゲン大佐殿と親交を深めたいのか尋ねた時もそうだと仰ってましたし、料理を作るといふ事になった時も、それはしおらしく自信が無いと仰っていました」

「これは……間違いないな」

「ノイマン大尉殿もそう思われますか！」

「いいや！」

ノイマンは対・尋問訓練でターニャに豚と言わしめた巨軀を逸らして、その体格相応の声を張る。

「そうとしか考えられない！ となれば作戦立案だ。第203航空魔導大隊は、頼れる中佐殿にさえ頼られるほどの猛者揃いだと、証明しなければなるまい」

「ノイマン大尉殿……！」

「ああ……いいのか？ 本当にいいのか？」

「ほら、ヴァイス大尉殿もご協力お願いします。何も休みを全て返上する訳ではないのですから」

「いや、中佐殿のためとあれば、それこそ休みなど無くても構わないのだが……何かとん

でもない勘違いをしているような気が……」

ターニヤにチョコレートをもたらした時より少しマシ程度のうろたえ具合であわあわ言っているヴァイスを放つて『レルゲン大佐殿の胃袋を握り潰そう！ 手作りお料理大作戦』

「女性からプレゼントをもらう時、男性はどのような食べ物だと嬉しいのですか、ケーニツヒ大尉殿？」

「それは難しい質問だな……」

ケーニツヒが面長の顔を傾げて考え込む。そこにノイマンが背筋を伸ばし真っ直ぐ右手を上挙げた。文字通り挙手である。

「セレブリヤコーフ中尉、重要なのは『何を貰うか』ではないとしたら？」

「と、言いますと？」

「まず前提に、男という生き物は一部に於いて相当アホだ。レルゲン大佐殿も男に産まれた以上そこは変わるまい。グランツ少尉、貴官も男ならわかるだろう」

「ああ、なるほど！」

「俺もソレが言いたかったんだ」

「ケーニツヒ大尉殿まで？」

全くわかっていないヴィーシャを尻目に盛り上がる大隊員たちだったが、それもすぐ

に収まりケーニツヒがヴィーシャに向き直る。

「つまり、何を作ってもいい」

「何を作っても？」

「そうだ。何を作ってもいい。その代わりに……絶対に『何か』を作らなければならぬ」

「確かに……。中佐殿は初め出来合いのものを買ってきて……」

ヴィーシャの言葉にヴァイスも頷く。

「なるほど、それであんな大騒ぎを……。というか、中佐殿が出来合いのものでいいと言っていたのなら本当に思慕の——」

「男というのは、『平時の最高級レストランのフルコースに勝る物を食べる』より『女の子に作ってもらった普通の食べ物』の方にずっと価値を感じる生き物なんだ。」

手作りというたった数文字に込められたその想いこそが……。何よりの栄養……！

圧倒的……養分……！

勢いだけでヴァイスの言葉を流してノイマンは続ける。

「となれば何を作るかだが……たしか中佐殿はチョコレートが好きだったな」

「はい？ ええ、確かそうだった筈ですが……しかしノイマン大尉殿、食べるのはレルゲン大佐殿ですよ？」

「ギヤツプ萌えだよ」

「は？」

「ギヤツプ萌えだ。大局を見渡し、的確な判断を下し、自身の戦闘能力も卓越している中佐殿。しかし想い人に何をあげればいいのかわからないという乙女な一面。わからないからこそ自分の好きな物をあげようという子供心。何から何までいじらしいじゃないか！

……なんかレルゲン大佐殿を聞討ちしたくなってきた」

「滅多な事を……と言うのが正しいのだろうか、俺も同じ気持ちだ」

「ケーニツヒ！」

「俺もです。なんかこう、娘を嫁にやる親の気持ちというか……」

「グランツはそんな歳でもないだろうし、私だつて嫁も娘も居ないが、わかる」

中隊長以上4名はレルゲンへの殺意を確認しながらも、敬愛するデグレチャフ中佐殿の幸せが最優先だと顔を寄せ合う。

「それでは私がチョコレートケーキを作りますので、皆さんはこのリストの材料集めをお願いしてもよろしいでしょうか」

「いつのまにそんなものを書いていたんだ？ とまれ、中佐殿のためだ。なんとしてみせよう」

ノイマンが拳を前に突き出し、親指を上立てる。

「今作戦は今までで最も重要な物である可能性があります。隊員各位、気を引き締めて臨んでください」

「セレブリャコフ中尉、それは考え過ぎじゃないか？」

「いえ、ヴァイス大尉、中佐殿の目は本気のそれでありました。あの顔をご覧になったでしょう？」

「言われてみれば確かに……グランツ、どう見る？」

「自分はそういった機微には疎い方ですが……アレは本気だったんじゃないでしょうか」

「そうか？ 私がおかしいのか？」

「セレブリャコフ中尉殿の手前大きな声では言いませんが、ヴァイス大尉は一度自分のおかしさを再確認したほうがいいのでは？」

「そ、それは言わない約束だろ……」

ヴァイスが力なく抗議し終わるが早いのか、扉が開き小さなシルエツトが顔を除かせる。

「入るぞで」

「デグレチャフ中佐殿！」

全員直立。ヴィーシャに至っては立った勢いで数センチ浮かび上がったほどだ。近くの隊員同士で気まずそうに視線だけ交わす。

ターニヤは小難しそうな顔をして隊員たちを一瞥し、その軍人まみれのむさくるしい空気にまったくそぐわない声質と、その空気に対して模範的な口調で話し始める。

「さて、大隊諸君。流石にピアホールで連日飲み明かせとは言わないにしても、気を張り過ぎず体と心を休める機会だ。参謀本部の心意気を無駄にせぬよう、節度ある休暇を楽しんでくれたまえ。私も私で休暇を満喫させてもらおう。では、解散」

一同全員がターニヤの言う『休暇を満喫させてもらう』という言葉をそのまま飲み込むほど付き合いは短くない。

しかし、気を遣ってくれている小さな大隊長殿の厚意を無駄にするほど大隊員も子供ではない。勿論本気で体調が悪そうなのであれば止める所だが、栄養失調気味の瘦せた体に不相応過ぎるほどの覇気や、時には鬼気まで発する目の前の子供は、正しく幼女の皮を被った化け物だったのだ。

などとヴァイスあたりが戦慄しているうちにヴィーシャは器用に背中にだけ汗をかきながらニコニコとターニヤに話しかける。

「では中佐殿、料理作りはいつになさいますか？」

「本当に作るのか……じゃあ三日後に頼む」

「はい！　では私はこれで」

あつという間に飛び出していったヴィーシャを見送り、自分たちに残された今日を含めた三日間を有意義に使うため、ヴァイスを始め中隊長たちもそれに続いて飛び出していった。

「なんだあいつら？　という顔をした第一中隊長でもあるターニャに見送られた2, 3, 4中隊長たちは顔を寄せてリストに目を向け歩きながら話す。

「役割分担が必要なほどあるとは思えないが、どうする？　私はチョコレートとココアと小麦粉なら恐らく仕入れてくれるが、他の物は市勢によるな」

「正直言つて流通状況がよくわからないな。ただ、嗜好品でしかないチョコレートを手に入れられるとなれば他のものは必需だ。難易度は一気に下がる。流星はチョコ大好き副長殿だ」

「ブランデーは確かセレブリヤコーフ中尉がトランプで巻き上げてきた物品にあったな。アレを使おう」

「他のものも高いだけで恐らく入手はそこまで困難ではない筈だ。中隊長全員で回つても今日中に手に入れられると思うが？」

「生クリームは日持ちしないから前日に手に入れるのがいいだろうな」

「よし、それでいこう。隊員たちはどうする？」

「休暇でいいだろう。実際そうだし」

むさくるしい男どもが寄つてたかつて甘い物の材料を買つて歩く相談をしていたその時、ヴィーシャはというと……。基本的にアホで抜けている中隊長たちだが、戦争とターニヤの事で失敗をするかもしれないなんていう発想すら出てこない程度に彼らを信頼している。そのために材料集めは任せて自分が出る事がエプロン探しだと思つた彼女は仕立て屋に向かつていた。

もちろんエプロンが無くてもケーキは作れる。しかし、一番付き合ひの長いヴィーシャでさえターニヤの私服姿なんて全く想像できない。軍装以外は寝間着しか見たことが無いほどである。

参謀本部に出向くのだから軍装が正しい事もわかる。だが、もう一つが欲しい。もう一つターニヤの魅力を引き出したいのだ。

そのために彼女はかわいらしくも上品なエプロンを、貴族ですら買わないような値段で注文してきた。

しかし、第203航空魔導大隊は常に戦場にある部隊だ。給料が他の隊より特別高いという事はないが金を使う機会もほぼ無い。ちよつとした服を10着ほど買える値段でエプロンを買つたからといって、実の所痛くもかゆくも無いのだ。

仕立て屋から帰つてきたヴィーシャは、夕方に生クリームを除いた材料を持ってやつ

てきたヴァイスに「レースの付いたエプロンを着せて参謀本部に行かせるつもり」と言ったところ、「何で今言うんだ！」と血相を変えて部屋から飛び出していったのを見送って首を傾げる事になった。

ヴィーシヤがターニヤとケーキを作る話 下

「はああああああ……」

「ん？ 何か間違ったか？」

「いえ！ 何も問題ありません！」

皆様、お久しぶり（？）です。ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴナ・セレブリャコフであります。

先ほどの溜息に良く似た吐息はデグレチャフ中佐殿の髪の毛の香りを肺で濾過した結果生み出された排気音なのでお気になさらぬよう願います。

さて、先ほどから中佐殿の手を取り足を取りチョコレートケーキを作っている訳ではありませんが、至福の時間に他なりません。

いつもは尽きない知識を持っているかのように理知的で、未来を見通すかのように聡明な中佐殿が、年相応の少女のように可愛らしいエプロンをつけて何も知らない事にチャレンジしており、それを先導しているのが自分だという一点のみで筆舌に尽くし難い悦楽を感じてやみません。

先ほどから何度か逃げ出そうとするのを抑えて抑えて、なんとかオープンに生地を入

れる所まで漕ぎつけたところです。

「ところでセレブリヤコフ中尉」

「はい、何でしょうか、デグレチャフ中佐殿」

「コレは今何を作っているのだ？」

「ええ!?! わからなかったのですか!?!」

ヴィーシャは予想だにできなかった質問に思わず聞き返してしまふ。すると、いつものように自信に満ちたものではない、少し困ったような声でターニャが返事をした。

「うむ、いや……ケーキなんだろうとは何となくわかるのだが、正直こういうものを食べる機会が無かったから全く完成図が予想できん」

その言葉にヴィーシャは固まった。

ターニャは孤児である。親に捨てられ、幼少期を『一般的』の水準が普通の家庭と比べれば赤貧と言うよりほか無い『普通の孤児院』で育てられ、孤児院と軍以外の何もかもを知らないままここまで来たという事は大隊の共通認識だ。

チョコレートケーキなんていう贅沢品をゆっくり堪能する時間なんてある筈が無かったのだ。

とヴィーシャは考えた。実際は作った事が無くさほど興味も持たなかったからだし、

食べたことも何度かあるが、そんな事は当然ヴィーシャには伝わらない。

ありもしない悲惨すぎる過去を勝手に想像し、自分の無神経さとこんな幼い子供にそのような生活を強いるしかない帝国の現状に涙を堪えるしか彼女には許されなかったのだ。

ターニヤは自分の真後ろで目を赤くし鼻をすする副官に「鼻水を垂らしてくるなよ」と思いながらもその副官の手で茶色いクリームを茶色い生地塗りたくっていった。

「完成です！ お疲れ様でした」

「私はほとんど見ているだけだったかな」

「まあそれは戦後にゆっくり覚えられたら良いかと。中佐殿はまだまだお若いのです」

「戦後か……まあ、そうかもしれないな」

戦争以外を知らないという過酷過ぎる人生の中で、戦後を全く想像できないのも無理からぬ事だ。ヴィーシャは、ターニヤが幸せであってほしいと願わずには居られなかった。

その勢いのままケーキを前もって用意していた箱に詰め簡素にラッピングを施し、ヴィーシャはターニヤの背を押し、宿舎の外に追いやる。

前もって待機していた車に乗り込み、運転手に扮したヴァイスに「お待たせしました」と声をかける。

「首尾はどうだ？」

「計画通りです」

「そうか。では私は運転に徹しよう。後は頼んだぞ」

「はっ！」

間もなく車はターニャを乗せ、参謀本部へと走り出す。ヴィーシャの手に持った鞆の中でターニャの方を向いたレンズが絶え間なく開閉を繰り返している事を知っているヴァイスは気が気はなかったが、幸いにもその事はエンジン音と路面のギャップにより気付かれる事が無かった。

後日、この一連の写真が最高額貨幣として一部の層で流通する事は言うまでもないだろう。

とまれ、無事参謀本部にたどり着き、ヴィーシャが受付に話を通していると後ろから聞き覚えのある声が聞こえたため振り返る。

「おや、貴官はデグレチャフ中佐——ッ!？」

「はっ! お忙しい所失礼いたします、レルゲン大佐殿」

「う……ああ。」

ヴィーシャが見るに、どう見てもレルゲンは普段と一味違う、具体的に言えばレースのフリルがついたエプロン姿の自分の上官に見惚れている。推すなら今だとヴィーシャはターニャに声をかけた。

「中佐殿、贈り物贈り物」

声が大きすぎたのか、一瞬非難するような目線を向けられたものの、すぐにレルゲンに向き直りターニャは口を開く。

「失礼いたします。レルゲン大佐殿、お時間よろしいでしょうか」

「あ……ああ。特に問題ない……ついてきたまえ。その、出来れば貴官の副官も……」
「では、私は外で待機しております。中佐殿、ご武運を」

まったく、他の女も誘うなんて、レルゲン大佐殿は乙女心を全く理解していないようだ。ふりふりという擬音が出かねない奇妙な怒り方をしながら外に歩いて行くと、妙にそわそわしたヴァイスが出迎えてくれた。

「ど、どうだったんだ？」

「もう、大尉殿は焦り過ぎですよ。いつバレるかとか冷や冷やしたんですから。とりあえずコンタクトには成功しました」

「そうか。……うまくいくといいな」

「はい！」

彼らはふとした拍子に忘れてしまうのだ。自分たちのあまりに頼りになる大隊長殿がまだ幼子だという事に。うまくいけばいくだけレルゲンの立場が危うくなるという事に。

勿論、彼らの言う「うまくいく」とターニャやレルゲンの思う「うまくいく」は全く別の方向を向いているので、そのような事は普通では起こりえないのだが。

しばらくして、難しい顔をしたターニャを出迎えたヴィーシャは勿論首尾を聞き、「渡せたぞ」と普通に返されてがっかりしたものだだったが、帰ってから余った材料で作ったケーキを食べ終わる頃にはすっかり機嫌もよくなっていた。

ターニャに返されたエプロンを折りたたみ、丁寧に鞆の奥にしまったヴィーシャは、いつになるかわからない次の機会のために大事にエプロンをとっておく事を決めたのだった。